

前回は「正しい授業準備のしかた」についてお話ししました。その際に、慣れるまではぜひとも板書ノートを作成してほしいとお伝えしましたが、今回は、実際の授業での「板書テクニック」について解説します。

一日一枚主義

前号で、板書ノートを作る際のポイントとして、「分量が多すぎないか」注意することを挙げました。教師はつい熱心に、たくさん盛りを盛り込んでしまいがちですが、板書が多いことと授業の熱心さは関係ありません。むしろ、有能な教師は、絞りに絞って、本当に重要なことのみをまとめます。目安としては、「二日に黒板（ホワイトボード）一枚」程度が適量です。何回も消して次々に写させるのでは、生徒も疲弊するだけです。一日一枚主義のメリットは、授業の終わりに黒板を見直せば、その日の授業のポイントがひと目でわかる点にもあります。

また、どうしても一日一枚では収まりきらない場合、ベテラン教師がよく使う方法は、黒板の（生徒から見ると）左半分には、最後まで残しておきたいポイントやまとめを書き、右半分は消してもよい内容を書き、授業を展開させるやり方です。参考にしてください。

板書のコツ

板書の際の注意点は、①文字は正確に大きめに書くこと、②板書中も決して生徒に背中を向けないこと、③早く書くこと、です。国語の時間だけでなく、誤字脱字はもちろんのこと、略字なども使わ



小林由香（こばやしゆか）

ないようにします。そして、後ろの生徒でも読めるように字はやや大きめに書くように気をつけましょう。

また、新人の先生で、黒板に向かつて時間をかけて書く人がいますが、その間に生徒は隣の生徒にちよっかいを出したり、消しゴムのカスを投げたりしていませんか？ 要は、退屈させてしまっているのです。教師は、生徒の方を見ながら、一人ひとりと視線を合わせ、解説しながら板書するように意識してください。決して黒板に向かって話をしないように気をつけま

板書ルールを作る

さて、ベテラン教師でも案外徹底できてない点を一つ挙げます。それは、教室内に「板書ルール」が確立されているかという点です。

一番よくないのは、「聞きながらノートを写す」というやり方です。人間は、手を動かしながら聞くと、どうしても耳がおろそかになり、肝心の授業内容が頭に残らなくなってしまうのです。ですから、教師の解説中は、生徒はいつさい手は動かさずに、集中して先生の話を聞く時間にする、というルールを徹底するのです。そのかわり、解説の区切りがついたら、きつちりと板書を写す時間をとることです。授業のリズム・メリハリにもつながりますし、意識して教師が教室をコント

ロールすることは大変重要と言えます。

ノートの点検を行う

授業を聞く時間、ノートを写す時間、と区切りをつける、教師のノートチェックもやりやすくなります。生徒は一斉に黒板を写しますから、その間、教師は期間巡視して、ノートのとり方の指導をすることができるようになります。教師は、自分の予習ノートを板書して、それが生徒のノートに再現されると思ったら、甘い！ 初期段階で、教師が一人ひとりのノートを覗き込み、細かく具体的にノートの取り方を指導しないと、先生の板書ノートとは似ても似つかぬものが生徒のノートに再現されているのです。

第2回

板書テクニックを磨こう

(株)新経営サービス・人事戦略研究所コンサルタント

小林由香

